

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

佐藤菊弥先生がご逝去されて・・・

今年の夏は、尋常ではない暑さが続いています。熱中症対策を万全にしつつ活動することになるかと思いますが、子ども達の安全を第一に考えていただきたく、お願い申し上げます。

私は現在、市川FC（市川トレセン）6年生のドイツ遠征で、ドイツバイエルン州ローゼンハイム市に来ております。今年の参加者は選手21名、引率者は私を含めて3名です。

市川FCがドイツ遠征を開始したのは、今から30年前の1994年。コロナ禍で3年間開催できませんでしたので、今回は4年振り27回目の遠征となります。

ドイツ遠征を始めた経緯等につきましては、委員長通信第4号に載せてありますので、ご一読いただけると幸いです。

昨年行われたワールドカップ本大会の場で、日本はドイツに対し逆転勝利を収めました。ドイツ遠征を開始した当初は、まだ日本がワールドカップ本大会に出場するのが「夢」の時代でしたので、まさかこんな日が来るとは・・・。2対1でタイムアップのホイッスルを聞いた時には感慨深いものが込み上げてきたのを覚えています。

さて、ドイツに来て7日目。ここまでほぼ毎日、主に午後に練習試合を組み、前の日の試合で浮き彫りとなった課題を次の日の午前中の練習に組み入れて修正し、午後の練習試合に臨む、このようなプログラムで過ごしています。

ドイツのチームと試合をすると吸収することが多く、短期間に集中して試合をすることで、間違いなく子ども達は成長します。27回目となる今回も、いつもの回と同じように、最初の試合とは、明らかに違うチームに変身することができたように思います。



このようにここでの過ごし方は今までと変わらないのですが、大きく変わったことが一つ。それは佐藤菊弥先生がいないことです。

佐藤菊弥先生は、令和4年10月20日にご逝去されました。享年68歳でした。

あまりにも突然の、早すぎる別れに、私自身言葉を失い、何をやっても喪失感が勝ってしまい、とても追悼の言葉を考えられる状態ではありませんでした。あれから10カ月が経っておりますが、悲しみが癒えることはありません。

皆様ご承知のように、佐藤菊弥先生無しでは、市川市サッカー協会第4種委員会は語れません。現在当たり前となっている4種委員会の主催する全ての大会、市川FCのトレセン活動及び、このドイツ遠征、市川FCレディースの活動、指導者講習会、審判研修等は、今から30年以上も前に、当時4種委員長だった佐藤先生が礎を築いたものです。私は次の委員長として、その意思を受け継ぎ、継承したに過ぎません。

今考えて見ると、佐藤先生の決断は豪快に見えて、実は類稀な先見の明に裏打ちされており、しかも計画はいつも繊細でした。そしてその決断の基準は「子ども達のためになるか」でした。

1993年の、確か秋頃だったと思います。その時私は市川FC5年の監督でした。

「石原。来年の夏この子たちを連れてドイツに行くぞ！」佐藤先生のあまりにも突然の提案にただただ驚くしかありませんでした。「えっ？ドイツですか？」と聞き返したのを覚えています。その当時4種委員会は、元全日本であり実業団東洋工業で一世を風靡した、仁村昭雄（にむらてるお）氏に指導者講習会をお願いしており、その関係もあったと思いますが、あまりにも突然なことで聞き返してしまいました。

その後は、石井学という素晴らしいコーディネーターを得て、あれよあれよという間にバイエルン州サッカー協会総監督ラインハルト・クランテ氏との親交が始まり、翌年1994年の夏に小学生のチームがドイツ、バイエルン州に遠征し、1995年の初頭にはバイエルン州のユースチームが市川に来ることが決まりました。

日本が漸くプロ化してJリーグが始まり、サッカー熱が大きく高まったとはいえ、ドイツは前回1990年ワールドカップ優勝国です。何だかとても大それたことをしている気がしました。日本はまだワールドカップに出場さえしていないのですから…。

しかし、佐藤菊弥先生は「これからは海外だ」と私たちの心配を他所に、遠くを見つめていました。海外に行くことは子ども達のためになるというのです。

令和5年3月5日に佐藤先生の追悼集会を行いました。その集会に、多くの現役や元Jリーガーがメッセージビデオを送ってくれました。中にはドイツ遠征に参加した者も多くおり、何人もの子が「小学生の時、ドイツに行き、プロ選手になろうと決めました。」と語っていました。佐藤先生の決断は間違っていなかったと頷くしかありませんでした。

佐藤先生が4種委員会に残してくれたもの、それは計り知れません。彼が一生を掛けて残してくれた偉業に感謝しつつ、今後も「それは子ども達のためになっているか」を常に考え、ぶれずに4種委員会を発展させていこうと思います。

佐藤菊弥先生のご冥福をお祈りいたします。合掌。